

って大幅な伸びを示したため、前月比23億円の増加となっている。

証券取引所上場の加入者引受け電信電話債券については、コール・レートの低下傾向を見越した雑金融機関および一部地銀筋からの引合いが引き続き堅調であるため、相場は、上げ幅こそ本年夏ごろより縮小してはいるものの、なお統騰を示している(昭和46年6月償還の利付債年利回り、7月末12.7%、9月末10.9%、10月末10.82%、11月12日現在10.72%)。

起 債 状 況

(単位・億円、カッコ内は純増額)

	37年 10月	9月	前月比	37年 11月 見込み	36年 11月
事業債	162.3 (84.1)	116.0 (84.3)	+47.2 (-0.2)	184.4 (92.7)	132.0 (110.5)
一般	93.2 (36.7)	61.0 (39.2)	+32.2 (-2.5)	109.4 (44.8)	60.0 (48.2)
電力	70.0 (47.4)	55.0 (45.1)	+15.0 (+2.3)	75.0 (47.9)	72.0 (62.3)
地方債	26.2 (18.7)	20.0 (16.1)	+6.2 (+2.6)	28.0 (16.7)	20.0 (16.9)
政保債	93.0 (59.1)	87.0 (45.5)	+6.0 (+13.6)	120.0 (72.6)	70.0 (55.8)
計	282.4 (161.9)	223.0 (145.9)	+59.4 (+16.0)	332.4 (182.0)	222.0 (183.2)
金融債	734.1 (278.8)	629.8 (196.3)	+104.3 (+82.5)	750.9 (315.9)	623.1 (186.7)
利付	359.5 (249.7)	293.3 (164.7)	+66.2 (+85.0)	346.8 (225.3)	277.6 (163.9)
割引	374.6 (29.1)	336.5 (31.6)	+38.1 (-2.5)	404.1 (90.6)	345.5 (22.8)

(注) 1. 37年10月実績および11月見込みの純増額には一部推定数字を含む。

2. 金融債の37年11月見込みは期待額。

実体経済の動向

◇生産は大勢依然弱含み

9月の鉱工業生産(季節調整済み)は、+1.3%とやや上昇した。しかしこれには7、8月減産の反動増(自動車、家庭用電気器具など)による面もあり、ならしてみれば大勢はなお弱含みに推移しているとみられる(ちなみに7～9月平均は1～3月

平均比-1.1%、4～6月平均比-0.1%)。

特殊類別でみると、まず消費財では7、8月に減産の目立った耐久消費財が+3.5%とかなりの増加を示し、総合指数の上昇に大きく響いている。これは来夏用夏物電気器具(冷蔵庫、扇風機)の仕込み生産の開始、過剰在庫の調整進捗によるテレビの欠方ぶりの増産によるほか、精密機械(カメラ、時計など)の漸増傾向持続による面も見のがせない。これに対して非耐久消費財は、前月微減のあと9月も+0.6%の小幅上昇にとどまり、このところやや増勢の鈍化がうかがわれる。一方資本財は+1.6%と前月(+1.7%)に引き続き増加した。もっとも、農業機械など一部の増勢持続を除けば、前月同様一部大型機械の完工集中がみられたほか、夏季休暇による減産の反動増や63年型車生産の本格化による輸送機械の増加など、ここ一両月の生産低下の裏とみられる面が大きい。また建設資材は前月比横ばいにとどまったが、前月大幅増(4.1%)のあとでもあり、ならしてみればセメントの増産を中心に強含みに推移しているとみられる。これに対し生産財は、-1.0%と石油製品の生産調整進捗を主因に減少した。やや長い目でみても3～4月ころからの減勢は続いているとみられる。

一方、9月の鉱工業出荷は前月(+0.9%)に引き続き+2.0%とやや大きく上昇し、水準としてもこれまでの最高であった本年5月をわずかながら上回った(5月比+0.3%)。しかしこうした出荷の続伸には、一時的な要因(期末による大型機械、一部電気器具の出荷集中など)や輸出船積み増加(鉄鋼、一般機械など)がかなり響いている。4～6月、7～9月とならしてみると、出荷はほぼ横ばいに推移しているが、これは一方における国内需要の減退と、他方における輸出増加および一部滞貨の流通段階へのシフトとがほぼ見合っているためであろう。特殊類別でみると、非耐

久消費財は繊維(織物、染色整理加工品など)、皮革製品などが季節性ほどには伸びなかったことから -2.0%となった。これに対し耐久消費財は+7.2%と前月の落ち込み(-14.9%)とは様変わりの増加を示した。耐久消費財にみられる月ごとの極端な上下は、最近の季節変動パターンの変化(夏物、その他家庭電気器具の出荷時期の変化など)によるところが大きいと思われ、現にテレビ、ラジオなど夏物以外の電気器具、およびカメラ、時計など一部精密機械では、その出荷が期末月の9月に集中する傾向が強まっている。投資財関係では、資本財が+7.2%と前月(+6.6%)に引き続き大幅な上伸を示したほか、建設資材も+1.2%と7月以来3ヵ月続伸した。しかし資本財の出荷増加は、大型機械の完工がなかったために落ち込んだ6、7月の反動によるところが大きく、6~9月をならしてみればそれ以前の水準よりも低い。一方7~9月の建設資材、とくにセメントの出荷漸増傾向は、公共投資の増加による面が大きい。次に生産財の出荷は、前月下げ止まりのあと9月は+1.8%と上昇した。これは輸出船積み的大幅増加と一部滞貨の流通段階へのシフトによる鉄鋼出荷の急増(8月+6.9%、9月+7.4%)が主因であるが、生産財の一部にはわずかながら製品原材料の在庫

生産・需給動向(鉱工業)

(季節調整済み指数、前期比増減率は%)

	36年 10~ 12月	37年 1~ 3月	4~ 6月	7~ 9月	7月	8月	9月
生 指 数	297.9	307.2	304.2	303.8	303.5	302.0	305.8
前 期 (月) 比	3.7	3.1	-1.0	-0.1	-1.8	-0.5	1.3
産 前年同期(月)比	22.5	17.3	13.2	6.5	6.8	6.1	6.5
出 指 数	255.9	258.7	258.8	258.9	255.7	257.9	263.1
前 期 (月) 比	1.4	1.1	0	0.1	-1.5	0.9	2.0
荷 前年同期(月)比	15.1	12.3	8.6	2.6	2.1	1.5	4.3
製 指 数	258.1	284.0	279.3	297.3	283.3	292.5	297.3
品 前 期 (月) 比	16.7	10.0	-1.7	6.4	1.4	3.2	1.6
在 前年同期(月)比	30.5	36.1	33.0	35.0	35.6	36.6	35.0
庫 在 庫 率 指 数	101.4	108.4	107.6	113.0	110.8	113.4	113.0

(注) 通産省調べ(30年=100)。在庫は期末在庫。

圧縮一巡の影響とみられる動きもみられる。

9月のメーカー製品在庫は+1.6%と依然増加をみた。しかし、その増勢は若干鈍化したほか、在庫率も出荷の増加から若干低下した。最近の在庫増加の中心である耐久消費財は、出荷増加の反面、夏物電気器具の仕込み生産開始もあってなおふえており(8月+17.6%、9月+9.7%)、資本財と非耐久消費財も微増した。一方出荷好調の建設資材は減少、生産財も鉄鋼、石炭など滞貨の流通段階へのシフトもあって微減した。

この間、9月のメーカー原材料在庫は前月比横ばいとなり、ほぼ在庫減らしは一巡したようにかがわれる。内訳をみると、製品原材料は+1.1%と7ヵ月ぶりに増加を示した。こうした動きが9月の生産財出荷増加の一背景とみられる。これに対し素原材料在庫は、-0.9%と下げ幅は次第に小幅となっているが、なお減勢が続いている。一方8月の販売業者在庫は、-2.5%と久方ぶりに減少したが、これは輸入減による繊維原材料の減少を中心に素原材料が-8.2%と低下したためであり、鉄鋼、石炭などの滞貨はなお増勢を続けている。

8月の機械受注(海運を除く民需)は前月比+2.4%と若干増加し、前年同月比でも-51.0%とここ一両月(6月-56.2%、7月-59.9%)に比較すればやや持直しぎみにうかがわれる。しかしこれは主として電力、鉄道など非製造業部門からの受注増加によるものであり、これをもって製造業における投資意欲の変化とみるのは早計であろう。一方機械販売額(船舶を除く)は前月比+10.0%、前年同月比+12.4%、(前年同月比6月+11.2%、7月+11.0%)と増加したが、これには輸向けタービンなど大型機械の完工集中がかなり響いている。前述の資本財出荷の内訳である一般機械出荷をみても、8、9月の前年同月比がそれぞれ+5.5%、+6.2%と7月(-1.0%)に比して回復しているが、これにも大型機械完工に伴う反動

増が大きく響いているほか、製造業の設備投資動向とは関係のない農業機械の増加による面も大きい。これら諸指標の動きから、工事ベースの設備投資の減勢がやんだとみるのは無理のようである。一方、8月の建設工事受注高は、官公需が前月比+15%、前年同月比+54%と好調の反面、民需は前年を33%も下回る不振が続いている。また建築着工は、ここ数ヵ月ほぼ前年並みの水準で横ばいに推移している。こうした動きが、官公土木工事への依存度が高いセメントの好調と、反面における鉄鋼2次製品、製材などの不振という最近の跛行性を生んでいるとみられる。

需要関係の指標

	36年 12月	37年 3月	6月	7月	8月	9月
系 原 材 料 在 庫 (在 庫 率)	203.6 (91.8)	214.5 (99.9)	195.0 (93.8)	192.5 (98.1)	188.0 (93.8)	186.4 (93.1)
う ち 輸 入 分 (在 庫 率)	278.2 (105.9)	266.0 (101.8)	236.7 (96.3)	234.8 (99.6)	227.2 (96.0)	225.8 (97.1)
製 品 原 材 料 在 庫 (在 庫 率)	288.1 (121.4)	284.3 (120.4)	261.5 (110.0)	257.1 (107.8)	254.7 (108.5)	257.5 (111.9)
販 売 業 者 在 庫 (前年同期(月)比%)	243.0 (29.8)	241.0 (12.8)	261.6 (8.2)	266.6 (6.4)	259.9 (8.2)	— —
	37年 1～3 月平均	4～6 月平均	7～9 月平均	7月	8月	9月
機械受注(民需) (海運を除く) (前年同期(月)比%)	億円 590 (-30.6)	420 (-47.7)	488 (-45.7)	379 (-59.9)	388 (-51.0)	698 (-27.3)
機械販売(船舶を除く) (前年同期(月)比%)	億円 952 (26.1)	902 (15.1)	1,003 (11.9)	880 (11.0)	968 (12.4)	1,162 (12.2)

(注) 在庫は通産省調べ、季節調整済み指数(30年=100)。

機械受注、販売統計は企画庁調べ。

◇商品市況、鉄鋼中心に総じて低迷

10月から11月前半にかけての商品市況は、鉄鋼をはじめ非鉄、化学製品など総じて低迷の色を濃くしており、繊維がジリ安商状のあと最近に至って株価反騰、金融緩和期待など人气的要因から反発を示したほかは、全般に軟弱な地合いを改めていない。

商品別の動きをみると、鉄鋼は、下げ足こそやや鈍ってきたが、実需不振による荷動き停滞から形鋼、厚中板中心にジリ安が目立ち、11月にはい

って山形鋼、厚板など一部には6月の安値と同水準あるいはそれを割り込むものすら現われた。もっとも、その後は一部に小戻しもみられ、さすがに多少の底入れ感もきざしはじめた模様である。また非鉄も、実需筋の極端な買い控えから山元在庫が再び増加をみせ、銅、鉛が小反落を示し、石炭、化学製品や紙の大部分とともに軟弱な地合いが続いている。このほかこれまで保合いを続けていた木材は、一部上級材に適品薄による値上がりもみられたが秋場需要が結局期待はずれに終わったことがはっきりしたため、11月にはいり弱保合いに転じている。

一方繊維は、生糸、人絹糸、合繊など一部を除いては、実需の伸び悩みから全般に見送り人氣が強く、引き続き下押し商状を示し、10月後半にはとくに需給事情の悪い毛糸や綿糸の一部には安値更新もみられるに至った。しかし11月にはいつて、証券市況の立ち直りや金融緩和期待がにわかに市場人氣をはやし、綿、毛などの主要相場商品を中心にかなり目立った反発を示した。もっともその後の市況には、早くも上げ過ぎ訂正気分が出現しており、こうした反発も市況の本格的な立ち直りを意味するものでなく、むしろ長期低迷に対する業界のあせりのあらわれとみる向きも多い。

こうした中で、比較的地合いのしっかりしている商品としては、生糸、人絹糸、合繊、塩ビ、カ性ソーダ、セメント、あるいは需要期入りした暖房用中塊炭、クラフト紙、段ボールなどをあげう程度である。

このように最近の商況が依然低迷が続けている背景としては、これまでは遅ればせながらもいずれは本格的台頭をみるものと予想されていた秋場需要が、設備投資の沈静化や市況の先行き見通し難などから、結局期待はずれに終わったことが指摘される。一方供給面においても、各業界の生産調整がコスト上の制約などからほぼ限界に近づい

てきているうえ、鉄鋼にみられるように、大手メーカー自体が過剰在庫をかかえきれずに換金投げに出るなど、市況対策がここにきて行き詰りをみせていることも見のがせない。こうした状況から、最近に至り、鉄鋼では共販制を主軸とする不況カルテルの結成、また繊維の一部でも過剰紡機

の廃棄処分などかなり思いきった新しい対策が検討され始めている。しかし、当面の需給の実勢悪はおおうべくもなく、たとえ金詰りが徐々に緩和に向かうにしても荷動き活発化のきっかけにはわかにつかみ難い情勢にあるといえよう。このため業界には、供給面における調整努力もさることながら、むしろ財政などによる人為的な需要喚起を期待する声次第に強まってきていることが注目される。

10月の本行卸売物価(食料を除く)は、生糸、人絹糸、木材の一部などの上昇が響いて、前月比+0.1%となり、11月上旬は繊維全般の反発のほか、紙、ゴムなど一部雑品の値上がりが響いて前旬比+0.1%の続騰を示した。また10月の東京小売物価は、食料品の季節的な出回り安が響いて前月比-0.5%と続落、前年同月の水準を久しぶりに下回った。一方10月の消費者物価(東京)は、野菜の反騰や家賃地代、仕立代、サービス料金の値上がりなどからここ2か月続落したあと前月比+1.7%とかなりの上昇となった。

なお9月の輸出物価は、生糸、綿糸、鉄鋼製品、冷凍まぐろなどの下落を中心に、前月比-0.5%と続落をみせた。また輸入物価も、原油がフレート高から上昇したが、原綿、生ゴム、化学品の一部が下落したため、前月比-0.4%の続落となった。

◇輸出増から貿易収支の好調続く

10月の為替収支は、経常収支が引き続き好調であったほか、資本収支も4か月ぶりに受超に転じたため、総合勘定では85百万ドルと前月に続き大幅の黒字となった。貿易収支は、輸出が一段と増加したうえ、輸入が前月並みにとどまったことから前月を上回る黒字となった(出超95百万ドル、前月出超74百万ドル)。貿易外収支は、ここ3か月続いた外資系石油会社に対する親会社からの送金

卸売物価指数の推移

	上昇期 ($\frac{33}{11}$ ~ $\frac{35}{9}$)	下降期 ($\frac{36}{10}$ ~ $\frac{37}{10}$)	最近の推移							
			8月	9月	10月	10月上旬	中旬	下旬	11月上旬	
総平均	+10.4	-2.0	+0.4	+0.1	+0.1	保合	保合	+0.1	+0.3	
(食料を除く)	+12.9	-3.1	+0.4	-0.1	+0.1	保合	保合	+0.1	+0.1	
(食料・建材を除く)	+6.3	-3.1	-0.1	-0.4	-0.1	保合	-0.1	+0.1	+0.2	
鉄鋼	+5.8	-9.2	+1.5	-1.6	-1.4	-0.7	-0.3	-0.1	-0.6	
非鉄	+6.9	-9.1	-3.6	-0.1	保合	保合	保合	保合	保合	
機械	+0.9	-1.5	-0.1	保合	-0.1	保合	保合	-0.1	-0.1	
繊維	+8.8	-1.2	-0.1	-0.7	+0.4	+0.3	-0.1	保合	+1.0	
食料	+3.9	+1.2	+0.4	+0.4	-0.2	-0.1	保合	+0.3	+0.7	
燃料	+8.6	-0.9	-0.3	-0.1	+0.4	+0.1	保合	+0.5	保合	
建材	+40.6	-2.9	+1.9	+0.9	+0.9	+0.2	+0.4	保合	-0.4	
化学	+0.8	-3.5	-0.5	-0.4	保合	保合	保合	-0.3	-0.1	
雑品	+7.9	-1.8	-0.1	+0.2	-0.1	-0.2	-0.1	+0.2	+0.8	
生産財	+13.1	-3.8	+0.4	-0.2	+0.3	+0.1	+0.1	保合	保合	
消費財	+6.9	+0.6	+0.4	+0.4	-0.2	-0.3	+0.1	+0.2	+0.6	

CPI・小売・輸出入物価の推移

		36年中	年初来 (37年 1~10)	最近の推移			最近月 の前年 同月比
				8月	9月	10月	
C P I (東京)	総合	+8.8	+3.8	-1.6	-0.4	+1.7	+4.3
	食料	+10.6	+3.9	-3.9	-1.2	+3.4	+2.7
	家賃地代	+3.9	+2.8	+0.1	+1.4	+0.9	+2.3
	サービス	+13.2	+12.0	+0.5	+0.2	+0.2	+13.9
	公共料金	+6.1	-0.8	保合	保合	保合	+1.0
	その他	+4.8	+0.5	+0.3	+0.1	+0.8	+2.4
	被服	+6.8	+4.6	+0.3	+1.7	+0.5	+5.1
	光熱	+4.9	-1.5	保合	+0.1	+0.1	+0.3
	住居	+6.8	+0.7	-0.1	+0.7	+0.4	+0.9
	雑費	+8.1	+5.2	+0.3	-0.3	+0.3	+8.0
東京小売物価	総平均(食料を除く)	+7.9	+0.2	-0.9	-0.8	-0.5	-1.3
	食料	+5.5	+1.1	-0.8	+0.3	+0.9	+2.3
	食料	+9.6	-0.5	-0.9	-1.5	-1.6	-3.8
	繊維	+3.2	+2.2	-2.2	+0.9	+1.5	+2.2
輸出入物価	輸出	+0.4	*-0.4	-0.3	-0.5		-2.6
	輸入	+0.1	*-2.1	-1.2	-0.4		-3.6

(注)・*印欄は37年1~9月間。

ーム代金送金などがあったため、払超25百万ドルとなった(前月払超12百万ドル)。一方資本勘定では、短期資本は、ユーロ・マネーが前月に引き続きかなりの流入をみたうえ、為銀筋がこのところ外債代り金の流入などによって余裕ぎみとなっていた手元資金を圧縮したこと(為替統計上短期資本流入として扱われる)に加え、輸入ユーザンスの減少幅および輸出ユーザンスの増加幅が縮小したこと、などから流出が前月に比べ小幅となったため、差引22百万ドルの受超となった(前月払超87百万ドル)。また長期資本はインパクト・ローンの受入れなどがあって受超13百万ドル(前月は外債発行代り金の流入により79百万ドルの大幅受超)となり、資本勘定合計では35百万ドルの黒字となった(前月赤字8百万ドル)。

10月の輸出は、引き続き著しい伸長を示し、為替では前年同月比31%増の高水準となった。通関も前月にはわずかに及ばなかったものの、前年同月比25%増と好調を続けている。通関統計によって商品別の動きをみると、船舶をはじめとする機

械類、英国向け水産かん詰の伸長が目立ったほか、鉄鋼、化学製品なども依然好調が続いている。繊維品も、対米綿製品輸出交渉の未了などによる米国向けの伸び悩みにかわからず、インドネシア向け米綿委託加工分の積出しが行なわれたため、7～9月の水準を維持した。

このような輸出の好調は、信用状、輸出認証などの先行指標によってみるとここ当分続くものと思われる。ことに10月の輸出信用状はこれまでの最高を記録した。その内容をみると、米国向けはクリスマス用品の追い込みもあって軽機械、雑品中心に伸びているほか、鉄鋼製品も米国内業者の値下げにもかかわらず引き続き好調、一方欧州向けも、鉄鋼製品、水産かん詰が引き続き順調である。このところ不振のアジア向けも、大口機械分(発電、精糖プラント)があったためやや増加している。このように輸出が好調を続けている背景としては、輸出先の国内事情のほか内需の不振、企

輸 出 認 証 の 内 訳

(単位・百万ドル)

(月平均)	37年 4～6月	7～9月	7月	8月	9月	10月
食 料	29 (+74)	27 (+9)	25 (+22)	30 (+2)	25 (+7)	36 (+35)
織 維	115 (+20)	114 (+14)	106 (+14)	112 (+5)	124 (+25)	120 (+17)
化 学 品	22 (+35)	20 (+39)	24 (+73)	16 (-5)	20 (+65)	19 (+22)
金 属	62 (+29)	68 (+51)	64 (+42)	70 (+54)	70 (+59)	72 (+51)
機 械	114 (+25)	126 (+24)	128 (+27)	119 (+39)	129 (+10)	120 (+14)
雑 品	39 (+35)	42 (+33)	41 (+45)	41 (+22)	42 (+31)	39 (+37)
合 計	436 (+28)	448 (+23)	438 (+26)	442 (+19)	465 (+23)	455 (+23)
米 国	124 (+44)	135 (+31)	124 (+28)	142 (+32)	139 (+31)	132 (+23)
ア ジ ア	100 (+14)	98 (+26)	100 (+38)	93 (+12)	102 (+30)	99 (+16)
欧 州	57 (+58)	53 (+45)	46 (+60)	51 (+6)	61 (+91)	56 (+55)

(注) カッコ内は前年同期(月)比増減率(%)。
アジアはインド、タイ、フィリピン、シンガポール、インドネシア、台湾、韓国、香港、琉球。
欧州は英国、西ドイツ、フランス、イタリア、スイス、ベルギー、オランダ、デンマーク、スウェーデン、ギリシア。

為 替 収 支 の 推 移

(単位・百万ドル)

(月平均)	37年 4～6月	7～9月	7月	8月	9月	10月
輸 出	386 (318)	411 (337)	413 (337)	405 (345)	414 (330)	435 (331)
輸 入	397 (427)	355 (424)	375 (445)	350 (435)	340 (401)	340 (395)
貿 易 尻	△ 11 (△ 110)	56 (△ 90)	38 (△ 108)	55 (△ 90)	74 (△ 71)	95 (△ 64)
貿 易 外 尻	△ 20 (△ 10)	△ 13 (△ 11)	△ 16 (△ 12)	△ 11 (△ 10)	△ 12 (△ 13)	△ 25 (△ 12)
経 常 尻	△ 31 (△ 120)	43 (△ 101)	22 (△ 120)	44 (△ 100)	62 (△ 84)	70 (△ 76)
長 資	21 (20)	34 (9)	7 (1)	15 (1)	79 (26)	13 (29)
短 資	49 (75)	△ 42 (△ 4)	△ 9 (△ 51)	△ 30 (△ 4)	△ 87 (△ 54)	22 (△ 59)
資 本 尻	69 (96)	△ 8 (7)	△ 2 (52)	△ 15 (△ 3)	△ 8 (△ 28)	35 (△ 30)
誤 差	△ 18 (△ 4)	△ 2 (△ 7)	△ 8 (△ 7)	△ 16 (△ 13)	18 (1)	△ 20 (2)
総 合 尻	21 (△ 28)	32 (△ 101)	12 (△ 75)	13 (△ 116)	72 (△ 111)	85 (△ 104)

(注) カッコ内は前年同期(月)。

業の資金繰り難などからする強い輸出ドライブが、最近に至っても大勢としてはなお変化をみせていないことがあげられるようである。

一方輸入にはようやく下げ止まりの気配がうかがわれる。10月の輸入は、為替ベースでは前月並みの低水準横ばいであったが、通関でみると素原材料が増加したため、食料品(おもに砂糖)の大幅減少にもかかわらず総額では前月比6%の増加となった。なかでもこの2、3ヵ月減少を続けてきた石油の急増と、中小メーカー筋が6月ごろ発注したものの入着によるくず鉄の増加が目立っている。なおこれらはシッパーズ・ユーザンス付きであるため、為替統計にはまだ表われていない。また、10月から原油をはじめとして230品目の自由化が実施されたが(自由化率88%)、製紙用パルプ、2、3の消費財などに若干の増加気配がみら

れるのを除いては、いまのところとくに目立った動きはない。原油の輸入増も自由化の影響というよりは需要期入りと前月までの落ち込みの反動によるものとみるべきであろう。

輸入素原材料の在庫推移をみると、これまで輸入が押えられてきたことからかなり低い水準に落ちている。とくに繊維原料は自由化前の在庫水準からみればかなり低いが、最近の在庫感覚の変化を考慮すれば適正とみられる水準をやや割り込む程度と思われる。原油も適正水準をやや割り込んでいるようである。鉄鋼原料も、鉄鉱石はなお余裕含みであるが、くず鉄の在庫圧縮はかなり進んでいる。繊維原料、原油は季節的に輸入増加期にはいったが、このような状況にもかかわらずいまのところ企業の買付け態度は総じて慎重のようである。原毛は先高見越しから若干の補充買いの動きがないではないが、毛糸も含めていくつかの業種では先行き減産強化の動きもみられ、総じて生産は低迷を続ける見込みであること、企業の資金繰りも引き続きゆとりがないこと、加えて原綿については原料相場が軟調に推移していることなどから、素原材料輸入が季節性を上回って大幅にふえる可能性は少ないと思われる。

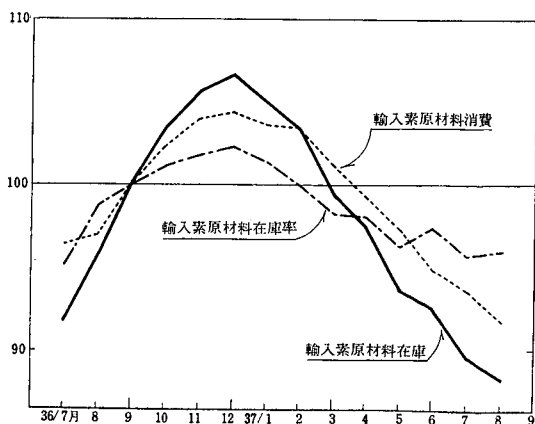
輸 入 承 認 の 内 訳

(単位・百万ドル)

(月平均)	37年 4~6月	7~9月	7月	8月	9月	10月
食 料	63 (59)	56 (59)	53 (53)	58 (62)	58 (60)	58 (37)
原 材 料	247 (314)	218 (291)	223 (286)	222 (280)	208 (305)	217 (196)
原 綿	33 (50)	27 (37)	28 (38)	28 (32)	25 (42)	27 (16)
原 毛	26 (37)	20 (27)	23 (26)	17 (17)	21 (39)	23 (21)
鉄 鉱 石	19 (20)	21 (21)	22 (20)	21 (24)	21 (18)	21 (16)
く ず 鉄	13 (50)	10 (35)	7 (36)	12 (37)	11 (33)	7 (20)
石 炭	13 (8)	12 (13)	11 (10)	13 (11)	11 (18)	10 (3)
石 油	48 (36)	38 (40)	44 (41)	37 (37)	34 (41)	48 (35)
木 材	21 (20)	23 (26)	24 (24)	23 (28)	21 (27)	19 (28)
鉄 鋼	3 (16)	5 (19)	4 (18)	7 (21)	6 (19)	3 (12)
機 械	63 (72)	51 (108)	50 (85)	72 (80)	32 (160)	71 (42)
そ の 他 共 計	428 (510)	378 (542)	374 (512)	404 (506)	355 (608)	392 (326)

(注) カッコ内は前年同期(月)。

輸入原材料消費・在庫の推移



(注) 金融引締め時を100とする各指数(通産省統計)。季節調整済み、3ヵ月移動平均。